

あ・ん

編集委員 石沢菜々子



## 舞台のない音楽会

数年前、子どもが通っていた保育園の音楽会でのこと。舞台を設けず、子どもたちは先生のギターに合わせて、その場で自由に動きながら歌った。「子ども主体の保育」の試みだが、舞台に並んでの合奏や合唱しかなかったので、カルチャーショックのような感覚だった。

そんなことを思い出したのは、先日、神戸を訪れていたデンマーク在住50年の小島ブングード孝子さんの講演を聞いたからだ。デンマークでは、幼いころから子どもに「どうしたいか」と意見を聞き、子ども自身に決めさせることが生活文化のように根付いているという。

例えば、保育園の昼食。大きな容器に盛られた料理を各自が取り分け、責任を持って食べ切るようにする。食べてみたいメニューがあれば、ポストに入れてリクエスト。手法はさまざまだが、小島さんは「『決定に参加する』ことを重視しており、

デモクラシーの芽生えは、幼少期から始まっている」と指摘する。

学校教育ではさらに決定に加わる機会が増え、学校運営を担う理事会にも生徒の代表が入る。グループワークも盛んで、連帯意識も高めながら対話の練習を重ねるそうだ。

「多数決でものごとを決めるのは暴力に等しく、対話と相互理解によって合意に至る。それがデンマークの民主主義」と小島さん。共著「デンマークにみる普段着のデモクラシー」で、国の歩みをたどりながら民主主義の在り方を問いかける。

昨年の総選挙では、投票率が84・2%、国会議員の平均年齢は42・8歳。幼いころから決定に参加する文化も影響しているのだろう。

日本でも、近年ようやく「主体的な保育」や「主体的な学び」にかじを切り始めた。子どもたちの成長を見守る行事も、多様化していくのかもしれない。